

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

Gary Dale Christian 氏

(University of Washington 教授)

1937年11月オレゴン州ユージーンに生まれる。1959年オレゴン大学を卒業した後、1964年メリーランド大学でPh.Dを取得。1967年からケンタッキー大学でAssistant/Associate Professorを務めた後、1972年にワシントン大学化学科教授。1993–2001年ワシントン大学理学部長、1995–1998年プロセス分析センター Faculty Director, 1988年ACS Division of Analytical Chemistry Award for Excellence in Teaching, 1995年Talanta Gold Medal, 1996年American Chemical Society Fisher Award in Analytical Chemistry, 1999年Charles University Commemorate Medal, 2003年日本分析化学会 FIA 研究懇談会 Scientific Honor Award Medal, 2004年Senior Scholar Award (Thailand Research Fund), 2005年Honorary Doctorate Degree (Chiang Mai University) などを受賞。現在 *Talanta* の編集委員長を務めるなど国際的に幅広く活躍している。

Christian 教授は電気分析化学、原子・蛍光光度法、流れ分析法など幅広い分野で40年以上にわたり活発に研究活動を展開して、300編以上の学術論文を発表し、分析化学の進歩・発展に多大な貢献をしている。これらの研究業績は後述するが、“Christian”と聞けば多くの人が“クリスチャン 分析化学”を思い浮かべ、またこの名著に学んだ人達も多いことであろう。同教授は「分析化学教育」の重要性を意識し活動されているが、その貢献度は1988年のACS Division of Analytical Chemistry Award for Excellence in Teaching の受賞によっても伺い知ることができる。1971年に初版“Analytical Chemistry”が出版されたが、2005年には“6th Edition Analytical Chemistry”が出版された。このうち第4版は1989年に「クリスチャン 分析化学 I,II」(土屋・戸田・原口監訳)として、また2005年に「原著6版クリスチャン 分析化学 I,II」(原口監訳)が出版され、国内では入門から専門に至るまで幅広く「分析化学」が学べる優れた教科書として高く評価され、人気の高い本である。2001年にタイで開かれた国際会議でお会いしたときは原著6版の執筆中で、分厚いファイルを抱えて“大奮闘中”と奥さんの Sue さんが笑いながら話しておられたのを思い出す。このほか、“Atomic Absorption Spectroscopy, Trace Analysis, Instrumental Analysis (2版)”, “Problem Solving in Analytical Chemistry”など多くの著書が出版されている。また PACIFICCHEM 2000 の“Chemistry and Community”のセッションではアメリカのオーガナイザー {日本側 小熊幸一氏(千葉大)}として活躍された。

一方、Christian 教授は各種の学会活動にも力を注がれている。*Analytical Chemistry* 誌の Instrumentation Advisory Panel や Advisory Board を、また *The Analyst*, *Frezenius' Journal of Analytical Chemistry* の Boards など多くの国際誌の発展に寄与され、1989年以来 *Talanta* の Editor-in-Chief を務め、現在も Joint-Editor-in-Chief として活躍されていることは衆知のことである。これらの学会活動に加え、ACS が企画した Committee of Examiners for the Chemistry Test of the Graduate Record Examinations や Scientific Board for the 1992 International Chemistry Olympiad のメンバーに就任し、活躍された。さらには NIH の Bioanalytical Biometallic Study Section のメンバーとして、また ACS の分析化学部門の委員長も歴任



され、アメリカのみならず、国際的な活躍は目を見張るものがある。

Christian 教授の研究は電気分析化学、原子分光法、プロセス分析、フローインジェクション分析、電気注入分析と多岐にわたっている。これらの研究の中で“流れを利用する分析法”の研究は1979年に遡り、ヘキサシアノ鉄(II)を用いる乳酸塩と乳酸デヒドロゲナーゼの定量や中空炭素電極を用いるグリセロールとトリグリセリドの電流滴定の研究は先駆的なものである。また、ガソリンのオクタン価を近赤外分光法で決定することに成功した。同教授は“連続流れ電気化学検出システム”の研究に早くから着手し、酵素分析、 μ FIA の開発、キャピラリーインジェクション分析法等の新しい検出システムを発表された。1980年代には FIA 研究の先駆者としてストップフロー、オンライン濃縮、反応速度分析、透析分離、溶媒抽出、ダブルピーク分析、スピリットゾーンなど特徴的技術に関する46報の論文を、また1990年代には FI, SI, 電気注入法などの革新的で新規性の高い72編の原著論文を発表した。また Center for Process Analytical Chemistry をシアトルに設立され、“流れ分析のプロセス分析への実用性”を実証されている。1984年に FIA 研究会(1990年に日本分析化学会 FIA 研究懇談会, JAFIA となる)が設立(委員長:石橋信彦九大教授)され、機関誌 *Journal of Flow Injection Analysis* (JFIA) も同時に発刊され、現在23巻目であるが、Christian 教授には JAFIA 及び JFIA の活動に惜しみなく支援・協力していただいている。1991年に熊本で開催された Flow Analysis V で plenary lecture を、1994年には石橋教授を偲ぶ JAFIA 記念講演会に來日された。また、Christian 教授主催の International Conference on Flow Injection Analysis (ICFIA) を JAFIA と共催すること {委員長:本水昌二氏(岡山大)}を提案され、1995年から10年以上にわたり共催が継続されており、同教授の JAFIA の国際活動への多大な支援に深謝している。また、Christian 教授の下で山根 兵氏(山梨大)、浅野泰一氏(元 DKK)、喜納兼勇氏(機能材料研究所)、中野恵文氏(鳥取大)、西浜章平氏(北九州市大)など多くの研究者が“流れ分析法”の研究指導を受けた。私は1995年以来 Christian 教授と付き合いさせていただいているが、同教授は大変温厚で、また真面目な人柄で、偉大な研究者であるにもかかわらず偉ぶることもなく、何でも気軽に相談できる先生との印象を多くの方が持っていることと思う。また Sue 夫人も明るく、大変賢く、思いやりと気配りのある人で、彼女の性格にほれほれするのは私だけではないさうだ。

Christian 教授の名誉会員就任を心からお喜びするとともに今後のご活躍を祈念します。

〔愛知工業大学 酒井忠雄〕

日本分析化学会名誉会員になられる

Erkang Wang(汪 爾康) 氏

(中国科学院長春应用化学研究中心 主任)

1933年中国江蘇省で生まれる。1952年上海瀟江大學化学科卒業、1959年チェコスロバキア科学アカデミー、ポーラログラフィー研究所において、J. Heyrovsky 教授(1959年ノーベル化学賞)の下でポーラログラフィーに関する研究を進め、“Polarographic behaviour of manganese complexes”でPh.D。中国に帰国し、中国科学院長春应用化学研究所で分析化学、特に電気分析化学の研究に従事。1981年同研究所教授・上席研究員。1992年から1996年まで同所長。1994年より現職。中国科学院第1級自然科学賞、世界知的財産機構賞、カリズミ国際賞、など受賞多数。1991年より中国科学院会員、1985年より中国国家議学位授与委員会化学部会委員、国家科学技術会議發明委員会委員、中国機器分析協会副会長を歴任。1993年より第3世界科学アカデミー(イタリア)会員を務めるなど、国内、国際的にも幅広く活躍している。

中国科学院会員、中国科学院長春应用化学研究中心主任 Erkang Wang 教授は、50年近くの長きにわたって分析化学、特に電気分析化学の研究を先導的に推し進め、中国の分析化学に今日の発展をもたらすとともに、中国化学を中心的に指導してこられた。また、2007年で第11回を迎える International Seminar On Electroanalytical Chemistry を長春で2年ごとに主催し、また2007年で第12回を迎える国際会議 Beijing Conference and Exhibition on Instrumental Analysis の主要組織委員として、我が国の電気分析化学、電気化学研究者の多数を招待するなど、分析化学および化学の発展と国際交流に尽力された。同教授は、J. Heyrovsky 教授とともにポーラログラフィーを発明した志方益三先生[1942年から大陸科学院副院長。戦後も1953年まで中国科学院東北分院総合研究所(現長春应用化学研究所)で研究]の長春における最後の学生であったこともあり、日本と中国の分析化学の交流にことのほか熱心に取り組んでこられた。例えば、日中分析化学会議、後の Asiananalysis には常に主導的な立場で関与され、1988年の合肥での日中分析化学会議、1993年の長春での Asiananalysis では組織委員長を務められた。

Wang 教授の50年に及ぶ研究から生み出された670編以上の原著論文、著書は、同教授の分析化学の広い範囲にわたる貢献の証左である。同教授の研究は多岐にわたるが、中でも電気分析化学の基礎と応用に関する顕著な業績は国際的にも高く評価されている。ここ数年は、基礎電気分析化学の蓄積の上に、生体膜電気化学、表面電気化学、液体クロマトグラフィー、キャピラリー電気泳動、バイオセンサーなどに関連して革新的な成果を次々と発表されている。

同教授の活躍は、長春の応用化学研究所を拠点として行われてきた。現在、同研究所は、国家重点科學研究中心として中国



における分析化学研究の拠点となっているが、この発展は、同教授の上記の研究活動に負うところ大である。同教授は、こうした貢献のゆえに、主要なものだけでも、国内外で12の賞を受賞されている。賞の題目の例を挙げると、「第2松花江の水質分析法の開発」(中国科学院科学技術大賞、1982年)、「複雑な電極反応のポーラログラフィーおよびその新手法」(中国科学院第1級自然科学賞、1989年)、「液液界面の電気化学」(中国科学院第1級自然科学賞、1990年)、「液体クロマトグラフィー/電気化学」(中国科学院第2級自然科学賞、1995年)、「電気分析化学の基礎研究」(世界知的財産機構賞、ジュネーブ、1997年)、「電気分析化学の研究」(第10回カリズミ国際賞、テヘラン、1997年)、「電気化学と生命科学の走査型電子顕微鏡による基礎研究」(吉林省第1級自然科学賞、2003年)、などである。

学術活動の中では、「分析化学」(Chinese Journal of Analytical Chemistry)の編集委員長を1988年から務められているほか、7国内化学誌の編集および *Anal. Chim. Acta*, *Talanta*, *Electroanalysis*, *Microchem. J.*, *Anal. Lett.*, *J. Environ. Sci. Health* などの国際誌の編集に携われ、分析化学関係学術誌の質の確保と向上に貢献されている。また、同教授は、IUPAC・分析化学部会・電気分析化学委員会委員(1987～1995年)、米国 Houston 大学(1984/1985年)、仏国 Dijon 大学(1988、1992年)、京都大学(1989年)、Hong Kong 科学技術大学(1996/1997年)、山口大学(2000年)の客員教授を努められるなど、中国および世界の分析化学の国際化、国際協力に尽力されている。

上記のように、Erkang Wang 教授は、広く分析化学の発展に寄与されたのみならず、我が国と中国の分析化学、電気化学の交流に貢献された。また、中国科学院会員として広い視野に立ち、長春から21世紀の中国および世界の分析化学を担う人材を送り出されている。このような Erkang Wang 教授が、本会の名誉会員となられたことを慶賀するとともに、これを契機に日中の分析化学の交流がさらに増進することを期待している。

〔京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 木原壯林〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

今 枝 一 男 氏

(Kazuo IMAEDA
星薬科大学名誉教授)

1925年愛知県名古屋市に生まれる。1945年名古屋薬学専門学校を卒業、1948年京都大学医学部薬学専修科に入学し、高木誠司教授、富田真雄教授、鈴木友二教授に師事。1957年名古屋市立大学薬学部講師となる。1959年薬学博士。1963年名古屋市立大学助教授後、1969年星薬科大学教授となる。1995年星薬科大学定年退任、星薬科大学名誉教授となる。この間、1959年「有機微量元素分析の改良に関する研究」に対し日本薬学会学術奨励賞ならびに鈴木賞、1978年「熱分解管-キャリアーガス法による酸素分析法の研究」に対し日本分析化学会学会賞。さらに、1969年有機微量分析研究懇談会委員長、1972年日本分析化学会理事（2年間）、1976年日本分析化学会副会長、1977年「ぶんせき」編集委員長（4年間）、1982年日本分析化学会関東支部長を歴任された。

今枝一男先生がこの度名誉会員にご推挙された旨の連絡を受けて、お祝いを申し上げるとともに、先生のご今後のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げたいと思います。

「一、二、酸素、四は深呼吸」意識して呼吸すれば心の安らぎ心呼吸！今枝門下生であればだれでも知っている今枝語録です。先生の研究の大半は酸素の分析にかけておられました。小生もその門下生の一人としていまだに「酸素」から更に打ち上げて「活性酸素」の研究を引き続いて行っております。今枝先生の星薬科大学就任当時は、300平方メートルある研究室に黒色の実験台のみで何も無い状態だったようです。しかしながら、先生は名古屋の自宅には立派な実験室をもち、幼少期から化学実験に対する果てしない夢と遊び心のある化学実験のおもしろさを抱いておられたため、新しい研究室の創成には何の不安もなかったようです。小生が卒論研究に入ったときには今枝流の「市販にない独自の装置づくり」「人のやらないことをやる」をモットーに研究が行われ、当時薬学では珍しい旋盤やダイヤモンドカッターをはじめニクロム線、石英管、スライダック、テスターなどの材料・工具が多くあり、工学部の研究室に似たような錯覚さえしました。その後、酸素分析法は三菱油化㈱との共同研究により、酸素直接定量装置・ガス-水分透過量測定装置として市販されることになりました。さらに、誘導期間測定装置、アルミ箔薄層クロマトグラム、光掃引型光音響装置など、次々と新しい装置の開発に手がけてこられました。

今枝先生はもう一つ「社会に役立つ研究」をモットーにして、社会に直結したテーマに取り組みられました。1986年、今でいう環境ホルモンの一つである有機スズ化合物が社会的な問題となっていました。当時この手の研究は研究室では全く取



り組んでいませんでしたが、NHKからの依頼で有機スズ化合物の実態調査を行いました。今までそれぞれのテーマをやっていた職員、院生、卒論生が、この研究のために総動員され、能登をはじめ日本各地へ出向いて魚を捕り、突貫分析を行いました。その結果はマスコミを通じて報道され、社会的なインパクトを与えました。さらに、1990年には、塩素に代わる代替消毒剤として二酸化塩素が注目され、その分析法と有用性について研究を行い、その甲斐があってプール水の消毒剤として使用が認められました。後に水道水の消毒剤としても認可されました。このような研究は学際的な価値はもとより、社会的にインパクトを与え、社会に役立つ研究として評価されました。とかく大学では趣味？で終わってしまう研究テーマがある中で、社会に還元できる研究のすばらしさを教わりました。

今枝先生といえば知る人ぞ知るギャグに富んでいて、特に「ギャル」に受けがよかったようです。懇親会やコンパの席ではウイットに富んだギャグが多く、人を引きつけ、笑いの世界に導く先生のお人柄が偲ばれます。学生時代の試験問題に「水とお水の違いについて書け」と出題されたことを思い出します。最初は冗談ではないかと思いましたが、ものには科学的なもの魂の入ったものがあり、ものが人の心と心のつながりに大きな役割を果たしていることの重要性を教わりました。現代科学ではまだまだ解明されていない事象が多く存在し、とかく非科学的事象としてとらえられることがあります。こうした事象は非科学でなく未科学であり、これから解明しなくてはならない課題のように思います。「科学にロマンがあり」、「現象の把握なくして創造性は生まれない」という今枝語録を次世代に伝えていきたいと思っています。

最後に、今枝先生および奥様には健康に十分留意され、今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

〔日本薬科大学 吉村吉博〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

小 川 禎 一 郎 氏

(Teiichiro OGAWA)
(九州大学名誉教授)

1936年生まれ、滋賀県出身。1959年大阪大学理学部化学科卒業。1961年大学院理学研究科修了。大阪大学助手。1966年理学博士（大阪大学）。1967～69年カリフォルニア大学バークレイ校博士研究員。1970年九州大学助教授。1978年九州大学教授。大学院工学研究科（1979年より大学院総合理工学研究科）分子工学専攻・分子計測学講座の初代教授として物理化学・分析化学の研究教育に従事。1985年日本化学会学術賞（物理化学部門）、1992年日本分析化学会学会賞、1999年島津賞受賞。1999年定年退官。九州大学名誉教授。2004年弁理士登録。現在、小川弁理士事務所所長。2006年日本弁理士会近畿支部ベンチャーサポート委員会委員長。

小川禎一郎先生がこの度名誉会員にご推挙された旨の連絡を受け、お祝いを申し上げるとともに、先生の今後ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げたいと思います。

先生は、大阪大学理学部化学科反応物理化学講座（広田鋼蔵教授）での卒業研究、修論研究を終えた後、同研究室の助手となり、論文“The Molecular Structure of Bridge Compounds: Diborane and Trimethylaluminum”をまとめて理学博士の学位を取得されました。その後、1967年から2年間、カリフォルニア大学バークレイ校 G. C. Pimentel 教授の研究室に博士研究員として在籍されています。当時のエピソードが、退官記念誌「分子を測る」に述べられています。特に印象的なのは、“バークレイ校では大学院生が研究を説明する際に、どこが面白いのかではなく、どこが独創的でユニークであり、どこに自分の創意工夫があるのかに重点をおいていた。その内容は広田先生のお得意の話であったが、ここで本当の意味を理解した”というものです。私自身が先生の研究室に在籍させていただいたのは先生の退官直前の短い間ですが、それ以前も含めて、研究者としての先生は常に基礎を大切に独創性のある質の高い研究論文を世界に向けて発信するという姿勢で一貫しています。

さて、先生は、海外から阪大に戻った後に電子衝撃発光スペクトルの研究に着手し、5か月弱後の1970年に九州大学工学部工業分析化学講座（石橋信彦教授）に助教授として着任しました。ここで、新しい色素レーザー開発とその分子高感度分析への応用の研究をスタートさせ、1978年からは九州大学教授として電子衝撃とレーザー化学を基軸に研究を進められています。1979年には九州大学の新しい大学院構想であった独立専攻大学院・総合理工学研究科が設置されました。その中の分子工学専攻7講座で唯一の基幹講座（他は研究所所属講座）であった分子計測学講座を担当され、分析化学的な側面のみならず物理化学的な分子の計測に踏み込んだ視野の広い教育研究



を推進されました。当時、内規により専攻のすべての委員をこなす必要があったことから、いかにうまく委員会をかいぐり研究時間を確保するかの術を学んだとも伺っています。

研究面では、1992年受賞の本学会賞に直接かかわる分野として、レーザーを活用した高感度・高機能な測定法を多数開発・発展させています。電子による分子の解離素過程の解析に関する先端的研究も含めて270余編の研究論文が発表されており、国内外において高く評価されています。教育面では、小川研究室で過ごした者が少なからず現在本会で活躍していることに示されるように、多くの後進を育てておられます。本会運営に関しても本部・九州支部の両方で重要な役職を歴任し、本会の発展に貢献されてきました。

先生は、現在、小川弁理士事務所を京都に開設され弁理士としてご活躍中です。1999年に九州大学をご退官後、数年間、九州地区の複数の大学で非常勤講師を務められており、その中に九州大学全学教育の特許法のゼミ担当をされていたことは伺っていました。先生の研究業績は基礎科学的な色彩が強いものでしたので、知的財産や特許への馴染みは薄かったはずですが、ところが、2004年のある日に弁理士試験に合格した旨のメール連絡をいただき、60歳以上での合格率0.9%という狭き門をクリアされたことに関係者一同で驚きを分かち合いました。法律的な知識については記憶力が勝負の分け目です。先生とおつき合させていただく機会を持った誰もが、先生の卓越した記憶力に驚かされた経験を持つものとは思いますが、この見事な転身を予想できたものはいないでしょう。現在先生は大学時代の経験を生かし、弁護士会や公認会計士協会と協力し、大学発ベンチャーの支援に特に力を入れておられます。

先生には、大学や本会の事情に精通された上で別の分野の視点からご意見いただけると存じます。先生のご健康をお祈りしつつ、また今後も後進をご指導いただけるようお願いしてお祝いの言葉とさせていただきます。

〔九州大学大学院総合理工学研究院 原田 明〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

箴 島 豊 氏

(Yutaka OSAJIMA)
九州大学名誉教授)

1935年福岡県北九州市に生まれる。1958年九州大学農学部農芸化学科卒業。1963年同大学大学院博士課程修了（農学博士）。同年九州大学農学部助手。1967年同助教授，1977年同教授，食品分析学講座を担当。1998年定年退官，九州大学名誉教授，広島県立大学教授。この間，1992年「食品の味・香りの評価に関する分析化学的研究」に対し日本分析化学会学会賞受賞，1998年「食品の品質因子の動態と解析に関する研究」で日本食品科学工学会賞受賞，その他学協会賞等受賞。日本分析化学会理事，副会長，九州支部長，第43年会実行委員長などを歴任。2001年広島県立大学退職，九州女子大学学長就任，2005年九州女子大学学長退職。

箴島 豊先生がこの度名誉会員にご推挙された旨の連絡をいただき，お祝いを申し上げるとともに，先生の今後ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げたいと思います。

いつも明るく，豪放な先生に初めてお会いしたのは，1967年10月でした。以来，先生の研究室で直接ご指導いただきましたので，かれこれ40年のおつき合いとなりました。この間，研究姿勢から教育理念に至るまで幅広くご教示いただいたことは，今日の小生にとって大きな財産となっています。特に，教員になってからは，「松本君，教育は繰り返す，繰り返すし与え続けるものですよ。見返りを期待しちゃいけません。」とか，「学生が来室したときは，どんなに忙しくてもすぐ対応しなさい。あとで来るように言うてはいけませんよ。」と諭されました。事実，先生はこれを実践されていたので，研究室は常に人気が高く多くの学生が集まってきました。一方，研究面では独創性豊かな構想を練ると同時に，10年先，20年先を読んだ研究テーマを次々に提案し実行に移してこられました。

先生は，所属する研究室が農学部食糧化学工学科であるところから，その研究領域を「分析化学をベースとした食品成分の動態及びその解析」に設定し研究を続けてこられました。先生は「食品は安全であることが大前提であるが，^{えさ}餌（飼料）と違って，まず“おいしく”なくてはいけない。」というのが口癖でした。そのため，「おいしさ」という極めて主観的で“あいまいもこ”とした食品の品質を官能との対応の下に定量的に取り扱い，客観化・数量化することに心血を注いでこられました。

味関連成分に関しては，電気伝導度法による酸味，塩味，甘味測定法を創設し，その装置化を行っておられます。更に，各種酵素センサーの開発を行い，それを連続流れ分析・複数成分同時分析システムへと展開されました。香りに関しては，温州ミカンの“イモ臭”や“off-flavor”の解明に始まり，コーヒーの香り成分分析値と専門の鑑定士による官能評価結果を多変量



解析し，各豆の分類・格付けが行われました。食品の香りの研究では，食品試料の持つ香りの性質（成分の種類とその量比）を変化させることなく捕集する前処理法の確立が最も重要であることを早くから主張され，直接カラム法による捕集・濃縮法やヘッドスペースガス分析法を確立されました。その他，食品容器内面材への香氣成分の収着解析，天然色素の構造と安定性，青果物鮮度保持技術の開発，機能性ペプチドの検索とその生理作用の解析，ミクロバブル超臨界二酸化炭素法による殺菌，酵素失活など，多方面の研究を展開してこられました。

このように先生の研究は，食品そのものを対象にしていたので，箴島研究室には常に最上級の食品試料が供給されていました。コーヒー研究では，大手^{ばいせん}コーヒー会社から最上級のコーヒー豆が焙煎後24時間以内に空輸されてきました。我々教室員はまず朝のコーヒーを楽しみ，香り，酸味，深みなどあれこれと批評した後，実験を始めるのが常でした。先生は常々，食品屋はそれぞれの食品の最上級品を味わってその味を覚えておく心構えが必要だとおっしゃっていました。このため，当時の学生，院生は味，香りにうろさくいっぱしの食通になっていました。きっと，彼らの奥さん方は苦勞していることでしょう。

箴島先生は学会の運営にもご尽力され，本部役員はもちろん，九州支部の分析化学講習会では，永い間ガスクロマトグラフィーの指導を担当されました。基礎実習に続く応用実習では，^{しょうちゅう}いも焼酎や焙煎コーヒー粉末の香り分析を紹介され，前処理の重要性を説かれました。参加者は香り濃縮物を嗅ぐことによって分析結果との符合に納得していました。

今でもお会いする度に，食の奥深さと分析値と官能との符合についてのロマンを語り合い楽しい時間を過ごさせていただいています。先生の今後ますますのご活躍を祈り，我々後進のご指導をお願いする次第です。

〔九州大学大学院農学研究院 松本 清〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

後 藤 克 己 氏

(Katsumi GOTO
富山大学名誉教授)

1929年北海道札幌市に生まれる。1952年に北海道大学理学部化学科を卒業後、1953年に北海道大学工学部助手に着任し、1961年に同助教授に昇任した。同年に理学博士（北海道大学）を取得した。1964年～1966年にカナダ国立研究所に留学した。1973年に富山大学文理学部教授に赴任し、理学部に改組後通算して22年間にわたり教育と研究に励まれ、1995年に富山大学理学部を定年退官し、名誉教授の称号を授与された。この間、1991年「疎水性イオン会合体の分析化学への応用」に対し日本分析化学会学会賞、1993年富山県の水質保全への功勞として地域環境保全功勞者表彰（環境庁長官）を受賞した。また、1994年に第55回分析化学討論会実行委員長を務めた。

後藤克己先生がこの度名誉会員に推薦されたことをお聞きして、心よりお慶び申し上げます。

32年前の9月、北海道から富山大学へ赴任した私を後藤先生はJR富山駅で迎えて下さいました。40度近い気温のムツとした空気の中で、さわやかな後藤先生が印象的でした。私と同じく北海道育ちの後藤先生は、富山の気候について私によくねぎらいの言葉をかけて下さいました。それから20余年間、先生の下で一緒に仕事をさせていただきました。若輩の私に辛抱強くお付き合いをしてくださりました。普段はスポーツをはじめ研究室のいろいろな行事を通して学生と積極的に交わってくださるやさしい先生でしたが、ひとたび研究になるといっさいの妥協を許さない厳しい姿になりました。研究では公定法を超える分析法の開発が目標とされました。実用に耐えない分析法は論文として投稿することはできませんでした。雑誌掲載の多くの論文に対して、“自分も使わないような分析法を提案するのはけしからぬ”とバツサリ評価を下されました。

ご研究は“水”に関して幅広いテーマを持ち、自ら本物の“水商売”人と名乗っておられました。一緒に開発した水質分析法で印象深いのは、溶媒抽出による陰イオン界面活性剤の吸光光度法です。先生はコバルトの2-(2-ピリジルアゾ)-5-ジエチルアミノフェノール（PADAP）錯体が置換不活性で非常に安定なことに強く関心を持ち、コバルトは+III価の状態、その錯体は+1であるはずだと予測されました。その錯体の電荷を確かめるために、イオン対の溶媒抽出が行われました。その後、この錯体の誘導体は陰イオン界面活性剤のイオン対抽出/吸光光度法のための試薬として市販されるようになりました。そんなことで、いつの間にかイオン対溶媒抽出の平衡論の研究にはまり込んで行きました。研究室でお昼の弁当を食



べながら、イオン対の抽出定数を陽イオンと陰イオンのそれぞれの寄与に分離することができないだろうか、というアイディアを出されたのもそんな雑談の中でした。その後、抽出定数を陰イオン、陽イオン、溶媒の三つ寄与に分解して、それぞれに数値を当てはめ（固有抽出定数と名づけた）、いろいろな抽出系においてかなりの精度で抽出定数を予測できることがわかりました。また、ミセル存在下での錯形成の平衡論にも関心を持たれるとともに、それを利用した分析法の開発を致しました。水処理のご研究も精力的に行われ、関連してアルミニウムやケイ酸の溶存状態別分析法の開発をされました。

このような室内の研究にとどまらず、スリムな体でフィールドでの研究活動も積極的に行われました。北海道の洞爺湖や富山県の黒部湖の水質調査に同行させていただき、貴重な体験をさせていただきました。

基礎学力の重要性、物事の本質を見抜く力と創造力の重要性、そして妥協を許さない研究姿勢を20年間拝見させていただきました。

冬は後藤先生の大好きなシーズンです。毎週土曜の午後（当時は半ドンでした）、車で郊外のスキー場に出かけるのが研究室の行事でした。研究室の1泊温泉旅行もスキーが目的でした。初心者でもスキー場の頂上まで連れて行くのが先生のお楽しみで、4年生になってスキーを始めた学生も、その恐怖体験を超え、卒業時にはすっかりその面白さの虜（とりこ）になっていました。

後藤先生に師事された大先輩の方々がおられる中で、このような執筆をすることは大変恐れ多いところですが、後藤先生が人並みならぬ教育者であることに言を俟たないと思います。

もう一つの趣味のバイオリン演奏を楽しみながら、ぜひご健康に過ごしていただき、これからも後進のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

〔富山大学大学院理工学研究部 田口 茂〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

酒 井 馨 氏

(Kaoru SAKAI
元宇都宮大学教授)

1920年11月福井県に生まれる。1945年広島文理科大学化学科卒業。金沢高等師範学校、金沢大学教育学部附属高校における研究で、1957年大阪大学より理学博士授与。1957年日立製作所日立研究所入社、1969年同社那珂工場副技師長、1974年本社計測器事業部副技師長。1976年宇都宮大学工学部環境化学科教授、1978年同大学評議員、1980年同大学工学部長、1986年定年退官。同年日立計測エンジニアリングへ嘱託、1990年同社退職。1984年日本分析化学会関東支部長、1985年同学会副会長(2期)、1987年同学会監事、1998年同学会永年会員、2001年同学会学会功労賞。

酒井先生がこの度名誉会員にご推荐されたことを、長年にわたってご指導いただいた一人として、心からお祝い申し上げます。学会功労賞の業績紹介(ぶんせき, 2001, 483)でご存知のように、大学ご停年前後の2年間、副会長として事務局と協力し、学会経理の健全化にご尽力されました[学会経営合理化に深入りした経緯:「関東支部 創立50周年記念誌」, 83-84ページ(2005年11月)]。酒井先生は創立35周年記念事業の予算委員長も務められましたが、先生のご苦勞がなければ、本学会は創立40周年を前に赤字経営に陥っていたものと思われる。なお、学会功労賞は、このときの先生のご功績に報いるために、創立50周年を記念して創設されたものと聞いております。

酒井先生は、1974年に新設された環境化学科の環境分析化学研究室の初代教授として、1976年4月に着任されました。そのとき、私の恩師である故品川睦明先生(大阪大学工学部原子力工学科)とのご縁で、修士を終えたばかりの小生を助手として呼んでいただきました。当初、研究室には実験台しかなく、早速日立の300型高周波プラズマ発光分析装置とHFA型黒鉛炉原子吸光装置を発注しましたが、納品されたのは年が明けてからで、準備期間のないまま、最初の卒論生の受け入れになりました。

先生は日立時代、分析機器の開発や応用をされたので、色々とアイデアを出され、その実現に学生と四苦八苦しましたが、1977年の秋にはプラズマ関係の、1978年春には黒鉛炉関係の学会発表を行えるようになりました。また、先生の会社時代からのご人脈により、1979年から数年間にわたり、トレース・キャラクターゼーションやトレース・アナリシスの関係で、科研費の特定研究と環境科学特別研究の組織に入れていただけたことで、環境試料の高感度分析法の開発にはずみがつき、小生の理学博士取得(主査、東北大学理学部鈴木信男先生)につながりました。



酒井先生は宇都宮市では官舎住まいで、日立市の自宅に帰られるには車がないと不便なため、50の手習いで約半年間かけて運転免許を取得されました。1982年9月に関東支部の行事として栃木地区で工場見学会が行われ、参加者は日曜午後にJR小山駅に集合しました。先生のお車を先頭に、後に会長や支部長などになられる錚々たるメンバーが数台の車に分乗して足利市の栗田美術館へ行き、館長による特別講義を開いていただき、その後伊万里、鍋島の陶磁器を鑑賞し、夜は宇都宮市のホテルで懇親会となりました。翌朝は益子町に向かい、県立窯業指導所、故浜田庄司氏の益子参考館を訪ねた後、午後は宇都宮大学で浜田庄司門下の島岡達三氏の特別講演を学生と共に聞くという次第で、工場見学会は、先生のご趣味である陶磁器の研究会となりました。

酒井先生は中国と関係が深く、広島文理大の同級生である中国科学技術大学の趙 貴文教授の講演会を開いたり、中山大学の張 展霞教授らの視察団を受け入れたり、精力的でした。1981年には、9月の上智大学での国際会議で発表するよう小生に命じたと思ったら、ご自身は8月から長期間中国へ講演旅行に行かれ、一人英文原稿の作成に苦しんだ覚えがあります(もちろん、最終チェックはしていただきました)。アジア分析化学会議の前身である日中分析化学合同討論会にも何回か出席されて当研究室の研究内容を宣伝され、その縁で国費留学生も受け入れました。中国へは、定年退官後も討論会や講演などで十数回行かれており、中国酒を満喫しているようです。

酒井先生は多才で、宴会などで興が乗ると、自作の一人狂言、「兵六お化け退治の巻」を披露されました。先生の名著「環境分析のための機器分析」は5版を重ね、韓国語版まで出版されました。ご退官後は、回想録「一学究の 日々是好日」(1991年)を手始めに、何冊かの随筆集を自費出版されています。今後もお元気で後進をご指導いただけるようお願いし、お祝いの言葉とさせていただきます。

[宇都宮大学工学部 清水得夫]

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

下 村 滋 氏

(Shigeru SHIMOMURA)
徳島大学名誉教授

1926年兵庫県神戸市に生まれる。1950年京都大学医学部薬学科卒業。1952年5月京都大学大学院を退学し、大阪薬科大学助手に着任。1954年徳島大学助手(薬学部)。1961年京都大学薬学博士。同年徳島大学助教授、1972年同教授にそれぞれ昇任。1988年「原子スペクトルを用いる水銀等の分析法の研究」により日本分析化学会学会賞を受賞。1991年停年退官、徳島大学名誉教授。1992年経済企画庁長官より消費者保護功労者表彰。1993年徳島文理大学教授(一般教育、1994年より家政学部)、1999年同大学を定年退職。日本分析化学会副会長、原子スペクトル分析研究懇談会委員長、日本分析化学会中国四国支部長、日本薬学会評議員などを歴任。

下村 滋先生がこのたび日本分析化学会の名誉会員になられるとお伺いし、心よりお祝いを申し上げます。

先生は、日本が戦争へと向かいやがて敗戦に至る時代に青春を過ごされました。第七高等学校(鹿児島)在学中には、多くの級友が学徒動員先の長崎で被爆死するなど、ただ命があることに感謝する日々であったと伺っています。しかし、どのような境遇にあっても未来に光明を信じ、教師や友人と生死を共にする中で学んだ科学の知識と人の和の精神は、その後の人生への貴重な礎となったそうです。戦後、京都大学医学部薬学科に入学され、無機薬化学教室では石黒武雄教授と久保田晴寿助手(のちに徳島大学学長)のもと、気相反応でのビリジン塩基の合成について研究されました。大学院生のとき、石黒教授のご紹介で大阪薬科大学薬品分析化学教室(榎 健寿教授)の助手に採用され、これを機に分析化学の道に進まれます。大阪日本橋の電器屋街めぐりの成果ともいべき電子工学技術は、学徒動員で身につけた金属加工技術とともに、分析装置の考案と製作のために大いに役だったそうです。

1954年、久保田先生のお勧めもあり、徳島大学薬学部薬品分析学教室(棚瀬弥一郎教授)の助手として赴任されました。教室には直示^{てんびん}天秤しかなく、翌年入った分光光度計と自作の導電率計を用いて研究を始められ、「酸化還元試薬による光度滴定法の研究」により京都大学薬学博士を取得されました。ご研究に転機が訪れたのは1965年。徳島での第5回中国四国支部分析化学講習会に、大阪府立大の武者宗一郎先生や中原武利先生をお招きして原子吸光分析の講習を行うなど、新しい手法を意欲的に採り上げられました。その受講生の一人から、「最新の電解槽の陰極から水銀の溶出が甚だしく、困っている」と相談があったそうです。早速ミニチュア電解槽を製作して実験を始められた先生は、水銀の気液平衡や高分子膜透過など、その不思議な物性に引き込まれていかれました。

1968年以降、科学研究費補助金も得られるようになり、最



新鋭の原子スペクトル分析装置を次々と導入されました。この結果、各種金属の分析法の研究が飛躍的に進展したことは言うまでもありません。しかし、筆者が感動したのは高額機器の話よりも、市販の「水虫治療器」(低圧水銀灯)や廃棄機器の部品を利用して水銀分析装置を自作されたという話です。その集大成はフローインジェクション-冷蒸気発生原子蛍光分析装置ですが、新聞の取材に「従来法の千分の1の試料量で測定ができる」と語られたのに、記者のメモは「4分の1」という活字に変わり、大変残念がっておられました。

先生のご研究に最も貢献されたのは、1971年から助手、助教授として活躍された森田秀芳先生(現 徳島大学大学開放実践センター教授)でしょう。筆者は1988年、同先生の後任として助手に迎えていただきました。京大薬で物理化学を専攻していた博士課程3年の時で、指導教官の転出や教室の変遷のため周囲とは無縁の研究を一人続ける中、自分の存在意義が見いだせなくなっていた時期でした。下村先生は見事な銀髪で、気品と暖かさと威厳を兼ね備えておられました。「ワシは停年まで2年ほどしかないから、好きなことをやりなさい」と言われました。現在、歯科医院を開業されているご次男と筆者が同い年であることもあり、親が子に接するかのよう可愛がってくださいました。下村先生に手を差し伸べていただき、その優しさにいたく感激した筆者は、これからは分析化学の世界で生きてゆこうと決意し、懇願してAASやFIAを教えてくださいました。

下村先生は徳島大学を停年退官後も、徳島文理大学教授や放送大学講師として教育に携われる一方、環境問題や消費者問題に関する各種委員会の委員長・委員として社会に貢献されてきました。現在でも、NPO法人の講師として一般市民を対象にコンピュータ講習を精力的に行っておられます。先生には奥様と一緒にますますお元気であられますようお願い致しますとともに、今後も後進をご指導賜りますようお願い申し上げます。

〔徳島大学大学院 HBS 研究部 田中秀治〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

庄 野 利 之 氏

(Toshiyuki SHONO)
(大阪大学名誉教授)

1927年3月大阪市に生まれる。1948年3月大阪大学工学部応用化学科卒業。同年4月大学院特別研究生となり、八浜義和教授に師事、1957年6月大阪大学工学部助手、1960年7月「フラン誘導体に関する研究」で工学博士(大阪大学)。1964年6月新良宏一郎教授に師事、大阪大学工学部助教授、1974年1月同教授。1990年3月定年退官、大阪大学名誉教授、大阪工業大学工学部教授。この間、1984年10月「ホスト・ゲスト現象の分析化学的研究」で日本分析化学会学会賞受賞。1996年3月大阪工業大学工学部定年退職。日本分析化学会副会長、「ぶんせき」編集委員長、第56回分析化学討論会実行委員長などを歴任。

この度、庄野利之先生が名誉会員にご推挙された旨の連絡を受け、心よりお祝いを申し上げます。

筆者が初めて庄野先生のご指導を受けたのは、新設された工業分析化学講座に4年次学生として配属された1964年で、それ以降現在に至るまで40年以上公私にわたりご指導を賜っています。工業分析化学講座に助教授として着任されるまでの先生のご専門は耐熱性高分子の合成であり、分析化学にかかわる研究は斬新な発想に基づき、着任以降に展開をされました。

まず、代表的な有機試薬であるジオキシム、 β -ジケトンあるいはシッフ塩基などについて、分析化学的に最適の試薬を求めて誘導体の合成とそれらの分析化学的性質の解明の研究を始められました。数年後には、熱分解ガスクロマトグラフィーによる合成高分子の連鎖分布を評価する研究にも着手されました。先生は、教授にご昇任されるや、クラウンエーテルおよびシクロデキストリンの特異的(選択的)なホスト・ゲスト相互作用を分析化学に導入、応用する研究に取り組みられました。ポリあるいはビス(クラウンエーテル)を設計・合成して優れた選択性を付与し、これら高度の機能性をもつクラウンエーテルを溶媒抽出剤、溶媒抽出比色試薬、イオン選択性電極のニュートラルキャリアー、液体クロマトグラフィー充填剤、分離膜などに応用され、金属イオンの選択的な分離や検出の研究を展開されました。また、疎水性空洞をもち、その中に種々のゲストを取り込んでその構造を認識するシクロデキストリンの分子認識能・不斉認識能に着目され、天然の未修飾シクロデキストリン、およびその空洞の外縁部に位置する水酸基を化学修飾してゲストに対する認識能を変えた化学修飾シクロデキストリンを化学結合した充填剤を合成し、これらを固定相とする選択的な液体クロマトグラフィー分離に応用されました。このホスト・



ゲスト相互作用に関する研究で、幾多の輝かしい業績を上げられ、世界的にも高く評価されておられます。この研究と同時に、微量の無機陰イオンを揮発性の有機化合物に変換する種々の誘導体化試薬を開発し、高感度分析する誘導体化ガスクロマトグラフィーの分野で先駆的研究もされました。このように、先生は合成化学の知識と経験を巧みに活かされ、分析化学に新しい分野を開拓されたことに感服させられる次第であります。先生はしばしば、“化学者は新規な物を作り出さなアカン”と生粋の大阪弁でおっしゃられ、まさしく“分析化学者”と申せましょう。

庄野先生は心豊かで包容力に富んだお人柄で、誰からも敬慕されておられます。研究で行き詰まって相談に何うと、すかさず適切なアドバイスをしていただきました。また、小事には拘泥されず“任すわ”の一言で済まされることが多く、師事している我々に随分自由奔放に活動できる環境を与えて下さいました。しかし、整理整頓と時間には大変厳しく、実験に用いる器具や機器のみならず実験台の上も寿司屋のカウンターのように綺麗にしておくこと、またやり始めたことはテキパキと速やかにし終えることを身をもって教わり、筆者の職場のみならず家庭生活においても大いに役立ったと感謝いたしております。

庄野先生は山岳スキー、テニスや野球などのスポーツ、さらに海釣りや蘭の栽培などなど幅広い趣味にも長けておられ、すべてにではありませんがご一緒させていただいた楽しい思い出が脳裏に焼き付いております。また、ご家族を思いやられるお気持ちを絶やされることはありませんでした。上述のように、広い学識と深い思考力、そして優れた人格を備えられた先生を師として仰ぐことができたことは、誠に幸運でありました。

先生の今後ますますのご健勝をお祈りいたしますとともに、さらなるご指導のほどをお願いする次第であります。

〔大阪大学名誉教授 田中 稔〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

中 埜 邦 夫 氏

(Kunio NAKANO
立教大学名誉教授)

1920年9月名古屋市に生まれる。成城高等学校を経て東京帝国大学理学部化学科へ進学。木村健二郎教授に師事。1943年9月同学科卒業と同時に大学院進学、直ちに短期現役として海軍に入隊。1945年同大学院に復学。1950年成城大学理学部助教授。1953年立教大学助教授。1957年「高周波滴定の機構の研究」で理学博士、1959年同教授。1986年定年退職、立教大学名誉教授、日本赤十字看護大学教授。この間、本学会関係では1977年関東支部長、第9回国際原子分光学会及び第22回国際分光学会議総務委員長。1981年および1982年日本分析化学会副会長。1983年「機器分析における線形化の研究」で、日本分析化学会学会賞受賞。1991年日本赤十字看護大学定年退職、現在に至る。

中埜邦夫先生がこの度名誉会員にご推挙された旨の連絡を受け、お祝い申し上げるとともに、先生の今後のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げたいと思います。また、私が中埜研究室の諸先輩を差し置いて、先生のご研究と人となりをも日本分析化学会会員の皆様にお知らせする栄誉を担ったことは不肖の弟子としては大変光栄に存じます。

立教大学時代 先生の研究は高周波分析法、ESR分光法、原子吸光分析法、電気化学分析法、アナログ計算器による反応解析への適用に関する研究に分類されます。先生は機器分析法の単なる応用ではなくて、その方法の根本原理を深く洞察することによって機器分析の発展に貢献してきました。すなわち、測定機器と測定物質を併せた系を測定システムととらえ、測定物質濃度による信号応答の線形性を追及していく装置および分析法の開発を行い、機器分析法における定量分析の地歩を確立することに努力されてきました。また、ESR法に積分法を導入し、ダブルキャピティを用いた積分法により物質のESR強度をその物質の属性として求める方法を考案、ひいては物質の不对電子数を求める方法を開発されました。

高周波分析法における研究を通して、①データの‘physical meaning’について理解すること、②考案した測定方法が専門家に駄目といわれても、簡単にあきらめてはいけないこと、③通説と思われていることも丸呑みにせず、不思議に思ったら自分で確かめてみる、などの大切さを学んだと聞いております。私は学部4年生から博士課程を修了するまで先生の下で研究指導を受けてきましたが、振り返ってみると、私への研究指導の際にも思いあたることが多々あります。

先生は学生に化学の基礎をきちんと学んで理学部化学科を卒業すれば、学んできたことをすぐには役立たせることは難しいかもしれないが、物事の原理を理解する考え方は将来何か問題が生じた時に必ず役に立つ考え方だからと常々述べておられま



した。このことは学生の研究および教育指導に対しても十分発揮され、問題の本質を的確にとらえ、実際に解決へと導く方法について教えることに努力されてきました。この方法を現代風というと、課題解決型の教育方法であり、現在立教大学理学部の方針の一つでもあります。

先生は野球が好きで、15年の長期にわたって理学部野球会の部長を務められ、また、毎年春秋には恒例の立教-東大戦を行っており、海軍時代の紺のズボン姿で颯爽と活躍されていた先生の姿を思い出します。なお、この立東戦は32年(64回)の長期にわたって行われました。

日本赤十字看護大学時代 立教大学を定年退職後、創設された日赤看護大学に要請され、化学担当教授として設備の整っていない中で苦勞されたという話を濱田悦子日赤看護大学長から伺いました。図書館長としても活躍され、また、研究の必要性を説かれ、教員の方々に研究方法を指導され、先生の退職後創設された大学院の基礎作りをしたと聞いております。先生は立教大学時代を通して、「教え子との繋がりを大事に下さい」と述べられ、実践してきております。卒業後各地の病院に散っていった教え子の所へ、学会の帰りに寄っていかれたと聞いております。また、日赤医療センターに行ったときには、看護大学の先生方の研究室に立ち寄り、話をされていくとも聞いております。

終わりにあたって 先日、先生のお宅を訪問して現在の立教大学化学科について話をしていたとき、僕は立教大学を定年退職して20年が経ったと述べておられました。先生ご自身は、私の学生時代と同じように矍鑠とされ、いまでも本会の年会および討論会に参加して皆さんにお会いするのが健康法だと話されているお姿が印象的でした。帰るときに、論文の別刷りをいただきましたが、本当に化学という学問が好きで、いまだに衰えない学問への探究心には頭が下がる思いがしました。最後に、先生のご健康を祈念して、筆を置かせていただきます。

〔立教大学理学部 加藤中英〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

山 本 勝 巳 氏

(Katsumi YAMAMOTO)
(茨城大学名誉教授)

1923年静岡県富士宮市に生まれる。旧制浜松高等工業学校を経て、1950年東北大学理学部化学科卒業の後、東北大学理学部分析化学講座助手、1959年理学博士、同講師、1961年同助教授。1965年茨城大学理学部教授となり、機器分析化学講座を担当。1986年茨城大学理学部長、1989年定年退官、茨城大学名誉教授、常磐学園短期大学教授。1991年学校法人常磐学園理事、常磐大学短期大学部学部長。1999年同学部長、教授退任、2002年まで常磐短期大学非常勤講師。この間、1986年「クロム及びモリブデンイオンの分析化学的研究」に対し日本分析化学会学会賞受賞、2000年春叙勲 勲三等旭日中授章。また1974年日本分析化学会理事、1982・1983年日本分析化学会関東支部副支部長、1988年同支部長、1989年以降同支部参与。

山本勝巳先生がこの度名誉会員に御推挙されましたこと、心よりお祝いを申し上げますとともに、先生の今後ますますの御健勝をお祈り申し上げます。

御略歴にもありますように、山本先生は東北大学理学部分析化学講座の御出身で、筆者にとりましては偉大な大先輩であると同時に、わずか数か月ではありましたが茨城大学で直接の御指導を頂きました。本会関東支部より山本先生の紹介記事の依頼があったことを御報告しますと、早速、先生がこれまでに様々な書誌に御寄稿になった総説や随筆などの別刷・コピーのファイルを手渡されました。Review of Polarography (Japan), 6, 81 (1958)の別刷に始まり、ぶんせき, 2000, 103 (分析化学のあゆみ: 恩師・先達に導かれて)、更に日本分析化学会関東支部創立50周年記念誌(2005)寄稿まで、年代順に整然とファイルされたその中に浜松工業会誌佐鳴第72号、60周年記念特集(1985)への寄稿文がありました。そこには先の大戦中に在籍された浜松高工での、激動の時代に立ち向かわれた先生のバイタリティーがあふれており、山本先生のルーツを拜見する思いがしました。

先生は東北大学で本邦初の分析化学講座を創設された小林松助先生の講義、最終講義を受けられ、その後講座を引き継がれた箱守新一郎先生の下で研究生活を始められました。卒業実験で「ポーラログラフ法による生物体中の痕跡元素の定量」を課題とされ、ポーラログラフ装置をすべて手作りで組み立てるところから始め手動式直読装置を開発され、その後、前濃縮分離法と結びつける研究に進まれました。箱守先生が御退官後は、引き続き同講座で岡 好良先生の下でフラボノイドとトロポノイドを配位子とする金属元素の吸光光度法に関する基礎研究を開始され、様々な興味深い分析化学反応を明らかにされました。茨城大学に移られてからは、8-アミノキノリン誘導体を



用いたクロム(VI)やバナジウム(V)の吸光光度分析及び一連の遷移金属(II)との錯形成反応、アミノポリカルボン酸とチオシアン酸イオンによる遷移金属三元錯体の研究、クロム(III, VI)とEDTAの反応機構、モリブデン(V, VI)のヘテロポリブルー反応の研究と吸光光度法への応用、活性炭によるクロム、モリブデン、タングステンの分離化学等々、大橋弘三郎教授(当時助教授)を研究協力者として、一貫して溶液錯体化学の基礎とその分析化学的应用に関して御研究を続けられました。それらの成果が日本分析化学会学会賞の受賞となり、さらにその骨太の御研究は筆者らの現在の研究テーマにもつながっており、例えばトロポロン錯体が示す特異な塩基性は多核錯体の生成を伴う抽出化学の研究に、また8-キノリノール誘導体によるモリブデン(V, VI)の高選択的固相分離など数多くあります。

茨城大学在任中の24年間には、100名を超す学部、大学院の分析化学専攻学生を育てられ、多くの優れた人材を世に送り出しておられます。筆者は卒業生の方々とは先生の御退官のお祝い、叙勲のお祝いなどでお会いする機会がありましたが、いつも大勢の卒業生が集い何十年たっても慕われる先生のお人柄がよく分かりました。また先生は、茨城大学理学部長、同付属臨湖実験所(現広域水圏環境科学教育研究センター)所長、御退官後も同じ水戸市にありますが常磐学園の理事、常磐大学短期大学部学部長など多くの要職を務めておられ、人望の厚さを物語っております。先生は以上のような教育と研究の傍ら、環境分野で地方自治体に長年多大の貢献をなされ、1989年大気保全功労者として環境庁長官表彰を受け、そのほか水戸市功労者表彰、自治功労者表彰などを受賞されています。

御退官後にお目に掛かる機会はあまりないのですが、学会の講演会や新年会などの行事でお会いすると、いつも大学の様子等を聞いていただき、時には貴重な御助言なども頂きました。今後も変わらず後進の御指導をお願いする次第です。

〔茨城大学理学部 井村久則〕

このひと

日本分析化学会名誉会員になられる

吉 田 仁 志 氏

(Hitoshi YOSHIDA)
北海道大学名誉教授

1927年北海道上川郡名寄に生まれる。北海道大学予科を経て、1953年北海道大学理学部化学科卒業。1958年北海道大学理学部化学科助手となる。この間、太秦康光教授に師事し、溶液噴霧法による発光分光分析法、有機試薬による無機イオンの吸光光度定量に関する研究を行う。1961年理学博士、1962年同助教授、1974年同教授となり、温度滴定法、等速電気泳動法、電気化学分析法等の研究を推進。1978～79年カナダNRCにて在外研究員。1989年より2年間は北大教養部長、1991年定年退官、北海道大学名誉教授。1988年「錯形成反応の考察に基づく電気分析法及び温度滴定法に関する研究」によって日本分析化学会学会賞を受賞。1980年度本会北海道支部長、1988年度本会副会長。

吉田仁志先生がこのほど本会名誉会員にご推挙されたとの連絡を受け、心からお祝いを申し上げるとともに、先生の元で長くご指導を受けたものとして、先生のお人柄等を紹介したい。

吉田先生は、一貫して北大理学部化学科に所属していたが、その研究生活の大半は教養部で過ごされた。先生の若いころには教養部の設備も不十分で、化学実験室も仮の建屋でドラフトもなく、硫化水素を発生させるキップの装置を屋外に置いて、雨の日には傘をさしながら定性分析の実験をしたこともあったそうである。教養部化学教室の吉田研究室も私や糠塚氏（現弘前大理工）がいた頃は、学生実験準備室の一部を借用したり、本来は廊下である部分を仕切って実験室にしていた。この狭い研究室に大型の冷蔵庫ほどの大きさの装置を2台も入れて温度滴定法の研究が行われていた。装置はすべて手作りで、空調のない実験室での温度管理には相当苦労していたが、誰もやっていないことをやるとする先生の意気込みが装置と院生を動かしていた。先生はまた、島津製作所で当時発売されたばかりの等速電気泳動装置をいち早く手に入れ、この装置によって錯形成反応を利用した希土類元素15種の一斉分離に成功するなど数々の優れた研究成果を発表され、その後のキャピラリー電気泳動法の発展にも大きく貢献した。先生は教養部の授業や会議でかなり多忙であったので、我々院生とのディスカッションは大抵夕方過ぎであった。「ホードダネ。」と言って我々院生を捕まえては、議論が始まり、いつしかそれは深夜にまで及ぶこともあった。電車がなくなり、先生の手でアパートまで送ってもらったことも何回もあった。雑誌会やデータ検討会はエンドレスであり、質問に対してあいまいな答えでは許してくれなかった。長くて厳しい雑誌会の最後はいつもお茶会で終わった。このとき吉田先生は、若いときの温泉分析での多賀先生との珍道中や鉱山や缶詰工場でのアルバイトの話面白おかしく話され、雑誌会での我々の緊張を解きはぐしてくれた。



吉田先生は、周囲の人からよく元帥と呼ばれて慕われていた。日本分析化学会のかんりの大物も元帥と言うのだから多少不思議でもあった。その理由には陸軍士官学校出身だからとか、軍歌が好きで良く歌うからとか諸説あるが、本当のところは誰も知らない。私はその理由を吉田先生の人の使い方にあると自分勝手に考えている。〈吉田先生はなぜ元帥と呼ばれるか。〉という命題を、〈吉田先生はなぜ大将ではなく元帥と呼ばれるのか。〉に変更してみると分かりやすい。大将と言うのは一兵卒、少尉から始まる階級の頂点にあり、人の動かし方もこの階級制度を利用して行われる。しかし、元帥と言うのはこの階級性を超越したところにあり、元帥にとって人はみな一兵卒であり、大将でもある。吉田先生が何かをしようとして人を動かすときは、学生も助手も教授もなくて、同列に並べて組織して事を運んだように思う。ある目的のことを最もよく考えているなら学生でも重用した。そのような組織力と行動力が元帥の元帥たる由縁であろう。

このような吉田先生の人柄を慕ってか、吉田研究室には種々の大学から意欲ある学生が多く集まるようになった。決して恵まれた研究環境とは言えない中で、吉田先生に育てられた学生は今各地に散らばって活躍中である。

吉田先生は、若いときから支部の幹事をされ、支部のことは隅々までよく知っていた。従って、支部長や支部の幹事の方もいろいろなことを相談しに先生のところによく訪問された。相談が終わる頃には酒宴になることもあり、我々院生も時に呼ばれて酒宴に加わった。我々にとってこれは支部の多くの先生を知るいいチャンスにもなった。

吉田先生は、特に研究とはこうすべきだと言うような話をあまりされなかったように思う。その代わりその行動で我々に示してくれた。何にでも全力で取り組み、決して手を抜くな、時に細心に時に大胆に。先生の今後のますますのご健勝を祈念したい。

〔北海道大学大学院地球環境科学研究院 田中俊逸〕